

神戸国際大学

キリスト教センター通信
2024年1月23日(第106号)



「終わり」の「はじまり」

神戸国際大学オルガニスト ミリアム 伊藤純子

自宅付近の神社では今月、様々な行事が行われています。元旦の初詣に始まり、小正月には、正月飾りを燃やす火によって年神様をお送りし1年の幸を祈る「とんど焼き」が行われていました。その後、恒例の厄除け行事へと続きます。

私は物心がついた頃からクリスチャンとして育ちましたが、日本古来の伝統を大切にしている家庭環境であったため、私にとって正月は非常に重みのある大きなイベントでした。年越しのための風習の数々を重ねていく中で大晦日を迎え、年が明けた朝の清々しく新鮮なことが、まるでそれまでとは全く違う次元の世界がそこに誕生したかのような、何から何までが「新しい」景色でありました。その新しさは私にとって特別な喜びをもたらし、正月が終わると突然そのワクワク感が喪失する感覚に襲われていました。

現状として、実際行う「ならわし」や「行事」は、そのころと比べてかなり減少しましたが、それでも大晦日にはある種の感慨にふけり、元旦の空からは猛烈なエネルギーと勇気を与えられています。その特別感、街頭で見かける正月飾りなどイレギュラーな光景によって更に高められ、「さあ新年が始まった!!」というフレッシュな心持ちを増してくれています。そのような私にとって、関西の松の内が東京より8日長いことにはお得感があります。

新年を迎える熱量はもちろん人それぞれでしょう。ただ、多かれ少なかれ新年はある程度のフレッシュ感が伴うものなのではないでしょうか。

「はじまり」のフレッシュさは「終わり」の体感があったからこそです。もし大晦日や正月というタイミングが存在しなかったら、いかがでしょうか。12か月で成り立つ1年の次に新たな12か月が巡ってくる、という感覚が存在しなかったとしたら、どのような感じでしょうか。おそらく、ノンベンダラリとして、フレッシュ感とは程遠い毎日となるのではないのでしょうか。それはつまり「今」というときが与えられているありがたみ、よろこびといった意識の喪失に繋がるのではないかと思います。

人間には必ず「死」が訪れます。この世での「終わり」のときは、いつの日か必ず与えられます。あの人にもこの人にも、そして自分にも、「終わり」のタイミングがやって来る、この必然的事実について、自分で意識するかしないかによって、自分の人生や日々の景色が、全く違ったものとして自分の目に映されるはずです。かけがえのない「今」に対する愛おしく新鮮な実感は、おのずと感謝の念を湧き立たせ、傲慢でひとりよがりな感覚から遠ざけてくれるのではないのでしょうか。「終わり」を意識することにより、今がフレッシュに輝いて見え、そのタイミングを迎えるまでの過ごし方、向き合い方、視線の向け方が180度変わってくるのではないかと。そのようなことを実感した今年の正月でした。



一口メモ 新年を迎えた特別感を表す歌は聖歌集の中にもあります。

聖歌 225 番

- ♪ 大いなる神の み手に支えられ / 新しき年に 主の愛を示す
- ♪ 旅路ゆくときも つねに導かれ / 恵みに満たされ この年を過ごさん
- ♪ 過ぎ行きし年の み守りを思い / 新しき年の 導きを祈る
- ♪ 喜びのときも 憂いのときにも / 望みはあふれる 主の愛と共に

